



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〈第四五号〉

小雪

しょうせつ

十一月二十二日

神宮徴古館

伊勢神宮には、「神宮の博物館」と呼ばれる施設があります。「神宮徴古館」といいます。そこには、お祭りに供える神饌や祭具、神職の装束などが展示されています。二十四節気は小雪、朝夕は肌寒さを感じるようになりました。

神宮徴古館は、内宮前から車で十分たらず、緑豊かな伊勢市倉田山にあります。明治四十二年に日本で最初の私立博物館として創設され、現在も白亜の西洋風の建物は堂々たるもの。常設展示では神宮のお祭りや歴史・文化に関する資料が展示されています。伊勢神宮をもっと知りたいという方にはおすすめです。

年に数回は特別展を開催。現在は、「最後の公卿勅使」明治天皇御奉納の御太刀公開」が開かれています。

この特別展では、江戸から明治に大きく変わる転換期の慶応四年（一八六八）に、明治天皇が伊勢神宮に勅使を遣わせ、新たな国の方針を天照大御神に奉告したことをクローズアップしています。勅使というのは、天皇からのお遣いのこと。今も神嘗祭など重要なお祭りには、黒い装束を身に着けて奉仕されています。会場にはずらりと明治天皇が奉納された御太刀が並びます。その数、十七振り。内宮に十振り、外宮に七振りが奉納されていました。伊勢神宮は、二十年に一度の式年遷宮の際に調製される御神宝の直刀をはじめ、あまたの刀剣を所有しますが、明治天皇が一度に十七振りもの太刀を奉納されたのは異例のこと。また、ほとんどの刀剣には慶応四年と銘が切られていることから新たに作刀されたものであることが伺えます。国の転換期に際しての大きなご決断を天照大御神にご祈願した太刀。その輝きは今も放っています。この特別展は十二月十七日まで。

文 千種清美



おかげの里便り

おかげ横丁

○ おかげ横丁の忘新年会

おかげ横丁の料理店では、忘新年会プランをご用意しました。くつろげるお部屋で伊勢路の美味しい料理をゆっくりとご堪能ください。

ご予算やご要望に応じて料理内容を承らせていただきます。（お一人様3,500円より）
20名様以上で無料送迎バスをご利用いただけます。

すし久	・・・「てこね寿し」など伊勢路の郷土料理	TEL/0596-27-0229
海老丸	・・・伊勢志摩の新鮮な海の幸や漁師料理	TEL/0596-23-8805
とうふや	・・・寄せ豆腐と天然穴子の創作料理	TEL/0596-28-1028
野あそび棚	・・・かまど炊きの土鍋ご飯と季節の食材	TEL/0596-25-2848
はいからさん	・・・明治・大正の雰囲気漂う洋食店	TEL/0596-23-8806

○ お伊勢さんのご遷宮展

今春から第63回神宮式年遷宮が始まりました。来年はいよいよ第1次のお木曳行事が行われます。

この時期に、地元の人や伊勢を訪れる方々にご遷宮への関心と理解を深めていただける企画展です。

期 間／12月5日(金) ～ 14日(日)

場 所／伊勢路名産味の館2階「大黒ホール」

企画協力／(有)伊勢文化舎

協 力／神宮司庁、上松町、三ツ紐伐り保存会、伊勢神宮木曾奉賛会(一社)、
上松町観光協会

後 援／伊勢市、伊勢市教育委員会、伊勢商工会議所、伊勢市観光協会、(株)赤福

お問い合わせ／おかげ横丁 総合案内「おみやげや」TEL0596-23-8838

五十鈴塾

○ 御樋代木奉曳式とお木曳きへの期待

6月9日、10日に行われた御樋代木奉曳、清めの雨が降る中、内宮は五十鈴川を曳いて風日祈宮橋から五丈殿へ、外宮は度会橋から陸奥で北御門を経て五丈殿へ立派に納まりました。ちょっと見には何の滞りもなく無事に斎行されましたが、長野県の上松から伊勢に来るまでの関係者の苦労や喜び、人々の御神木に寄せる思い、伊勢の人々の奉曳に賭ける情熱など内側に入らなければ分らないお話があります。内宮、外宮両方のこの行事にかかわった山中先生ならではのお話や、来年に迫ったお木曳の諸々の準備についてもお聞きしましょう。

日 時／11月28日(金) 13:30 ～ 15:00

場 所／五十鈴塾右王舎

講 師／山中 一孝(豆腐庵山中代表取締役)

参加費／一般 1,500円 会員 1,000円

講座についてのお問い合わせ・お申込み／電話 0596-20-8251

五十鈴茶屋

○ 五十鈴茶屋節気菓子

じょうよ
みさか薯蓣

神宮の月次祭の神前酒を醸造する折、お祈りを捧げるのが御酒殿祭です。
山羊生地に酒と麴を加えた生地で粒餡を包みました。
ほんのりとお酒の香る味わいが特長です。

さ ざん か
山 茶 花

唱歌の「たき火」にも唄われる山茶花は、椿の中でも唯一日本原産の花です。
こし餡を山羊入りの練りきりで包み、やさしい山茶花に仕上げました。

ざん なん もち
銀 杏 餅

神宮工作所の銀杏(いちよう)並木もすっかり黄色い衣を落とし、木枯らしが
吹く季節を待つところとなりました。銀杏のかすかな風味と粒餡を求肥で包み
ました。